



# 泪が僕を満たす



猫柳ハヤ

「暑い……。」

顔を伝って落ちる汗を手の甲で拭いながら、体温で温まった息ごと吐き出す。非道く足取りが重い。理由は異常な気温と云いたいが、きっとそれだけではなかった。

「何処まで行くんだい、」

先を歩く背中に問い掛けてはみたものの、逃げ水を追って進む君には届かない。かと云ってこれ以上大きな声を上げる余裕が僕には無いので、君が陽炎を捕らえるか、それに飽きるかするのを待つしか無いのだろう。視界が歪んで見える程の陽炎なら、一掴みくらい出来そうなものだ。

「何してるの、」

いつの間にか立ち尽くしていた。耳元の吐息を含んだ声に一瞬ぞくりとして我に返る。

「……君こそ、逃げ水は掴まえられたのかい、」

上擦ってしまう声を巧く隠せただろうか。

肩から提げた鞆のベルトを掛け直し、君は少しだけ頬を膨らませた。

「そんなこと為てはいないよ。」

「そうかな、随分とはしゃいでいたようだったけど、」

どうやら動揺していたのには気付かなかったようだ。いつものように軽口で自分の気持ちを落ち着ける。

「ところで僕は何所まで連れて行かれるのかな、」

当初の目的を思い出す。一緒に来てくれと頼まれたが、行く先までは教えて貰っていなかった。

「――、」

言葉では無く指先と視線で指し示されたのは、夏の日差しに照らされた白く眩しい道と、続く丘の上に建つ給水塔だった。

コンクリートの大きな給水塔は有り難いことに、その下に日陰を作ってくれていた。僕等は並んで腰を下ろす。外壁に背を預けて、足を投げ出して座る君を横目で覗いた。僅かに顔を上げて目を閉じている。しっとり汗の滲んだ額と紅潮した頬。鼓動が耳の奥で響いた。思わず目を逸らした視線が、地面に置かれた君の白く長い指先を捉える。

「……、」

僕はその指に微かに触れるように手を置くと、コンクリートの外壁に耳を当てて目を閉じた。中のポンプのモーターや水の音がノイズに成って僕に染み込んでくる。ざわついた心の中で澱になって溜まっていった。

「一、――、――……、」

不意に、静かな旋律が聴こえてくる。そっと目を開けると、君の形良い唇が優しく旋律を刻んでいた。

「綺麗な歌、だよな、」

僕が見入っているのに気付いて、君も目蓋を開く。そして、その旋律と同じくらい綺麗な笑みを浮かべて、僕を見た。

「彼が、くれたんだ。」

一瞬、心臓が止まる。本当に止まっておけば良い。君の言葉を聞きたくない。

残念ながら止まってはくれず、逆に早鐘のように全身を打ち鳴らす。薄々は感じていたのに。君の、彼への想い。

「この前、此处で。」

本当は、ずっと知っていた。知らないことにしていた。知らないことにしておかなければ、ならなかった。君と並んでいる為に。

「君にはちゃんと、伝えておかなくちゃあいけないと思って、」

「――知っていたよ、」

真っ直ぐな澄んだ君の瞳から逃げるように俯けた目に、触れているはずの二人の手が映る。こんなにも近くに居て、触れているのに、君の心は遠い。

「良かったじゃあ、ないか。」

そう呟いて、口を噤む。僕の想いは堰き止めなくてはならない。

それきり黙ってしまった僕を、君は同じく黙って見守る。暫くして脇に置いていた鞆の中から翠色のラムネ瓶を取り出した。飲み口のビー玉を押し込むと、炭酸の抜ける音と一緒にラムネが溢れ出る。慌てて零れてしまったラムネに口を付け、そのまま僕を上目遣いに覗き見た。

「飲む、」

「そう、だな。」

溢れたのはラムネだけじゃあなかった。

目の前に差し出されたラムネ瓶を素通りし、そのまま不思議そうに傾げる細い頸を抱き寄せる。静かに触れた君の唇は冷たく、炭酸で少しちり、とした。もしかすると、僕に対する拒絶反応だったかも知れない。

咄嗟に僕を押し退ける君の手から、ラムネ瓶が落ちた。流れ出したラムネは、倒れた拍子に再び飲み口を塞いだビー玉に止められる。僕の想いも止めなくては。止めてこの給水塔のように必要とされるまで留めておかなければいけないのだ。

君が駆け下りていく、元来た白い道が揺らいで見える。それが逃げ水なのか涙なのか、僕にはよく解らなかった。

・ ・ 了

給水塔・夏の日差しに照らされた白い道・触れられるのに遠い・早鐘・誰かの旋律・ラムネのビ  
一玉

#リプで貰ったキーワードやモチーフを使って世界観や世界を作るよ

水を失ったこの世界。水は唯一、給水塔でのみ手に入る。しかもsystemの都合上、僅かしか精製されない。ヒトの体液からしか精製されないのでは仕方がないのかも知れないが。

彼が給水塔へ向かって数日後、僕は給水塔へと急ぐ。走りながら目をやると、昨日の雪が道路の日陰にまだ残っていた。今日は朝から夏の日差しだ。直に融けて消える。季節が毀れているのかこの星が毀れているのか、僕等が毀れているのか。まあきっとそんなことは大した問題では無い筈。君が居なくなってしまう事に比べたら。

漸く給水塔が見えてきた。給水塔へは雪花石膏の破片を敷き詰めた道が続いていて、踏みつける度に抗議の声を上げる。声だけなら耳を塞げば良いだけだが、時折、夏の日差しに乱反射して白く視覚に訴えてくる。これは辛い。眼を閉じて目的地に着ける程、僕の方位磁針は正常では無い。寧ろ異常な方だ。君にしか辿り着けないのだから。仕方なく速度を落とし、手を翳して影を作りながら進んだ。どうしてか、影の中でも燐光は続いていた。

目の前に聳え立つ給水塔は大きな斜歯歯車(helical-gear)のようで、円筒形の水晶構造物の壁面に階段が貼り付いている。僕は躊躇わず、足を掛けた。

とても静かな旋律が漂っている。目の奥がつんとするような、胸に痛みを伴うような、誰かが誰かを想う旋律で、上からでも下からでもなく、ただじんわりと辺りに沁みだしていた。

ふと、僕は足を止める。水晶の壁の向こうに君の気配がした。

「僕はもう、このsystemに組み込まれてしまったんだ。」

君の声は鼓膜を震えさせることは無く、直接僕の内側に届く。声と気配を頼りに、水晶の壁に手を触れた。感じる筈のない体温を触れた指先に感じる。

「君は此処に居られない。」

触れられるのに遠い気配は強く僕を拒絶する。鼓動が大きくひとつ鳴り、その音で声が震えた。

「何故、」

「君は気付いていないのか、その眼の水晶体がただの硝子玉だという事に、」

「え、」

「ラムネのビー玉と同じさ。」

ラムネのビー玉。必要の無いもの。僕は君にとって要らないもの。

「水晶から溢れる泪以外は不純物が多過ぎて、清浄な水にはならないんだ。」

早鐘が鳴り響いて耳鳴りがする。君の声が聴こえない。煩い、僕の心臓。止めようか、今すぐ。

「ほらね、そもそも泪が出ない。君はこんなに泣いているのに、」

泣いている？ 僕が？ そんな体内の水分を無駄に消費するような愚かな真似をする筈がないだろう。

「もう僕はこの給水塔と同化してしまっていて、君を抱き締めることは出来ないよ。」

それきり君の気配は消え、水晶の壁は明らかに僕を拒絶するように光を失い、冥く冷たく閉ざされた。壁を抱くように、君を求めて再び手を伸ばす。ひんやりと冷たいだけで、もう、君の体温は感じられなかった。

階段を降り、給水塔の足元に膝を抱えて座り込む。来た時には気付かなかったが、辺りにいくつかのビー玉が転がっていた。どれもラムネ瓶の中で濁って輝く翠色のビー玉だ。

僕は流せない涙を心の奥に溜め込んだ、壊れた給水塔だ。給水塔に同化出来ない僕はきっと、このまま風化して灰になっていくだろう。君を焼き付けた、ただひとつのビー玉を遺して。

..了

給水塔・夏の日差しに照らされた白い道・触れられるのに遠い・早鐘・誰かの旋律・ラムネのビー玉

#リプで貰ったキーワードやモチーフを使って世界観や世界を作るよ